村上忠順翁顕彰会報

田原市博物館　（撮影：酒井）

村上忠順翁顕彰会報　第２６号

編集　　村上忠順翁顕彰会事務局
発行　　平成２７年３月３０日

★ 目 次 ★

・ロボットとの共存の時代　2
・歴史探訪「維新への騒めき」に参加して　3
・女性部研修会「犬山城下町散策の旅」　3
・村上忠順の図書賃借簿　『書籍』から　4
・平成２６年度活動報告　6
・忠順大賞入賞作品　7

ロボットとの共存の時代

村上忠順翁顕彰会 会長　近藤　光良

先日テレビを見ていたらびっくりするような光景が映し出された。今は二月であり、いちご狩りの時期だ。イチゴの栽培は温室の中で、かつ地上から離れた人工地盤で栽培されている。ここまではごく普通であるが、ここからである。イチゴは非常にデリケートな果実なため、その摘み取り方法は果実に手を触れないで、付け根をそっと切り取るのであるが、現れた画像には、ロボットが摘み取っているのである。しかも、しっかりと熟したものだけ柄のところで摘んでくる。これまでは、熟練者がしっかり熟したイチゴを傷めないように摘んでいたものだ。このロボットは熟度を判断し、イチゴを傷めないように摘む。まだ試作段階であるが、こうした光景を見ると、近いうちに、イチゴを摘み取る熟練者が不要になるのがわかる。ロボットはこのように、微妙な感覚を必要とする熟練者を排除していく。これは、人口減少に対する対策でもあるし、また、品質向上の面からも進んでいくように思う。

かつて、ロボットは人類から重労働を開放し、人はもっと生産性の高い仕事や余った時間で人生を楽しむことができる、と言われた。こうしてロボットが出現してくると、理想とは違う面がわかってきた。確かに二十四時間、均一に仕事を続けるというような苦痛はなくなってきた。さらには、危険な作業を人が行う必要もなくなり、安全性を確保できることとなった。その結果、人間の技能をロボットが乗り越え微妙な感覚を必要とする能力の継承は次第に不要になってきた。こうなると、人の誇りと役割は一体どこにあるのか心配になる。

野菜は虫が喰っていてもいい、キュウリは曲がっていてもいい、料理の味は毎日違っているのは当たり前、生き物はすべて個性があって当たり前、一つとして同じものはない、そんなことが認め合える社会でありたい。

昨年の四方樹大学では、村上忠順翁と蓮月尼との往復書簡「天飛雁」の一部を解読した。まずは、江戸時代の行書体の文字を読むのは至難の業である。しかも、速記文字のような崩し文字が並ぶ。しかも忠順翁特有の細い文字である。そのうえ、万葉仮名が使用されているため、普通のひら仮名とは少し違う。江戸時代の言葉遣いも現代の言葉とは異なる。素人にとっては外国語よりも難しい。しかし、名古屋大学の塩村先生の時代背景等を含めた解説のおかげで楽しみながら読み進むことができた。読み終えるには、まだまだ時間がかかるがチャレンジするだけの価値がある。

江戸時代には手紙が届くのに日数が相当かかったことや大切な手紙は控えを書き写しておくなど、当時の人は手紙をいかに大切にしていたかなど初めて知ることばかりである。

私たちは今や均一性、効率性が優先されるような社会に生きている。しかし、こんな時代だからこそ個性の大切さ、じっくり時間をかけることの大切さにも気付くべきだろう。

日本人は、これまでは異質な文化を受け入れ、自分たちにふさわしい文化へと昇華し、新たな文化を創造してきた。仏教、漢字、カナや工芸などがその典型である。明治以降に取り入れた科学文明、そして、第二次大戦後の日本の技術もそうであろう。

今、私たちは、高度に発達した科学技術と長い年月を経て培われた伝統的文化を融合することによって、ロボットのような先端技術と共存でき、本当の意味で生活がより豊かになれるように思う。そのための知恵は、忠順翁など先人たちが残した思想・文化を学ぶことによって得られるのではなかろうか。

歴史探訪

「維新への騒めき」に参加して

前田　銑治

私は今回が二度目の参加でしたが、地元に育ちながら忠順翁のみならず、郷土に関してあまりにも無知な自分を再認識する旅でした。

豊橋から田原への道中、時代劇で度々観たことのある「ええじゃないか騒動」の発端がその地であったことを知り、驚きでした。

今回の目的である、歌人、糟谷磯丸生誕二百五十年記念展（田原市渥美郷土資料館）では、磯丸が漁師の家で生まれ、苦労の末、歌を作るようになり、当時の人々の願いを歌にして「まじない歌」として多くの人に贈ったこと、それを掛軸にして床の間に掛けると、その願いがかなったこと等々、展示されていました。

その後田原市博物館では、渡辺崋山の生涯を知ることができました。学者、画家、政治家として日本有数の歴史的人物が田原藩の出身であったことも含め、私にとって今までは、伊良湖観光への通過点でしかなかった田原が、日本でも有数の文化の地であったことを認識できた、有意義な旅でした。

最後に、顕彰会会長はじめ事務局の方々の御苦労に感謝致します。

田原市渥美郷土資料館にて

女性部研修会

犬山城下町散策の旅

前田美津子

七月五日（土）、村上忠順翁顕彰会女性部研修会の犬山城下町散策の旅に参加させていただきました。

今回は「犬山おもてなし隊」という専門のガイドさんの案内で城下町を巡りました。

まずは、バスの中より、木曽川越しに小高い山の上に立つ犬山城を眺めました。ここは、通常の観光コースではないのですが、ガイドさんいち押しの景観スポットなのだそうです。

たしかに、全体が美しく凛とそびえるお城が見事なたたずまいでした。

城下町では、どんでん館で車山（やま）とからくり人形を見学しました。豪華な車山に、昔の人の祭りにかける熱意、意気込みを感じました。からくり人形を間近に見るのは初めてです。茶運び人形の実演を見せていただきました。からくりは、先人の知恵と工夫が凝縮された素晴らしい物でした。

町屋での昼食は、昔の料理を今風にアレンジした創作料理で、三段重箱の「春姫御膳」。目にも美しい盛り付けです。城下町で心豊かに美味しくいただきました。

午後からは自由散策。ガイドさんが案内して下さるとの事で、お城見学となりました。犬山城は以前にも訪れてはいますが、説明付きは、もちろん初めてです。城の成り立ちや別名白帝城の由来、城主達の話など詳しく解説していただきました。小さくても、ずしりと重く大きい歴史を持ったお城が生き生きと見えました。

最後にトヨタ鞍ヶ池記念館を訪れました。からくりの仕組みが、豊田佐吉発明の自動織機に活かされているのが、今日は改めて感銘を受けたのでした。

時々強い雨も降りましたが、皆の心がけが良いのか、降るのは屋内に居る時やバスの中の時。天気まずまず良し、食事良し。近いけれども詳しくは知らない犬山城と城下町を、深く知る事が出来ました。充実した一日でした。

お骨折り下さった事務局の方々に心よりお礼申しあげます。

ありがとうございました。

トヨタ鞍ヶ池記念館にて

村上忠順の図書貸借簿

『書籍』から

東京都立小岩高等学校主幹教諭
学術博士　中澤伸弘

村上忠順は蔵書家として著名であり、のちに蔵書を千巻舎と名づけた。その大方は現在刈谷市中央図書館の村上文庫に蔵する。本稿はその忠順の書物貸し借りの記録から幕末期の忠順の蔵書のもつ社会的な意味について簡単に報告するものである。

現在村上家に『書籍』と題する、忠順の図書貸借簿が一冊ある。（『村上忠順家所蔵図書目録』六七一番）これは安政期を中心に、忠順が図書を貸し借りした記録であり、一国学者の読書遍歴を伺ふ好資料である。

内容は人物ごとに借りた本、貸した本を書き纏めたものであつて、一人物ではその貸借の年代順に書物名が書かれてゐるが、巻頭が必ずしも貸借した時代の古い順ではないため、書きつけておいたものを纏めたものと思はれる。貸借についても必ずしも整理して書かれてゐないで、あくまでも本人の備忘録であつたやうだ。よつてまづ人物を貸借ごとに整理し、年代と貸し借りした書物の点数をまとめておく。なほ人物名は表記のままとし、括弧内に中澤が通称名を示した。住居地や死亡記録などは忠順の記載に従つた。また忠順の門人帳に名前のある者には●、忠順が編んだ『類題玉藻集』に歌が載る者には△をつけた。（5頁に記載　※）

最初に、ここに見える人物は地域的には刈谷、岡崎などの三河を中心に名古屋、吉田（豊橋）などの地域で忠順の住居地とその周縁に限られてゐることがわかる。（遠距離は伊勢の菰野）またここに見える人物中、忠順の門人帳に名が見える者は五名に過ぎず、必ずしも門人に限つて貸借が行なはれたわけではなく、広く貸借の門を開いてゐたことがわかる。また同様に忠順が編纂した『類題玉藻集』に歌が載る者は七名に過ぎず、歌人関係の者であるとも言へず、広い範囲の者を対象としてゐたことが伺へる。

次にこの記載を年代順に見てみると市岡犇蔵（和雄）の天保八年が古いがこれは後から書き足したのではないだらうか。それを除くと嘉永五年あたりからの記載となる。忠順四十一歳の時である。終りが明治四年であり、約二十年間となる。その間借りた人物（書物数）は十六人、百三点。貸した人物（書物数）は三十人、百三十点で、忠順が貸した人物・書物の方が多いことがわかる。

また貸借ともに書物の多い者を挙げてみると、借りた人物では、酒井利亮の嘉永から文久までの約十年間での五十一点が最多で、次に石川千濤の十点となる。ともに忠順の近くに存在した人物で、石川千濤は門人である。ついで光恩寺了観、大沢（名不明）の九点となる。光恩寺了観は忠順の門人で身近な人物であつた。貸した人物ではやはり酒井利亮が一番多く、嘉永から文久までの約十年間で三十七点である。次に深見篤慶の二十七点と続く。篤慶は忠順の門人で、娘婿であるからこれも関係が深かつた。

神社寺院関係で言ふと神職は三宅国之助と羽田野敬雄、竹尾正胤の三名で三宅からは『葬祭書』を二冊借り、『韓非子』を貸してゐる。また羽田野へは忠順の著作である『三河雑抄』を貸してゐる。竹尾正胤には守部の『稜威雄誥』と黒澤翁麿の選集『採風集』を貸してゐる。寺院では光恩寺、浄久寺、龍興寺、万徳寺である。殊に光恩寺は貸借ともにしてゐる。具体的に忠順が寺院からどのやうな書物を借り、また貸してゐたのかを次に挙げる。

光恩寺から借りたものは、『関典録』『智度論目録』『法華文句』『佛心印記饒舌談』『四教儀集註半字』『浄土真宗名目図』『法華経科註』『武教全書』であり、同寺への貸与は『古文』『芦鶴集』である。浄久寺から借りたものは『息評解謗編』で、龍興寺へ貸したものは『燕南紀□』、万徳寺へ貸したものは『東照宮御年譜』である。寺院から借用したこれらの本は閲覧しただけで写さなかつたとみえ、現在刈谷市の村上文庫には同名の書物はない。

更に細かく見ていく必要があるのだが、紙数がないので酒井利亮から借りた書物について見る。嘉永七年四月に本居宣長の『神代正語』『鈴屋集』、また信友の『鈴屋翁略年譜』を借りてゐる。忠順はこれらの宣長に関する基本的な書物をまだ入手してゐなかつたことがわかる。また安政三年には平田篤胤関係の『神字譌字編』を、翌年には同じく『西籍慨論』、五年には『春秋命歴考』『西蕃太古伝』を借りてゐる。（6頁へ）

※ 借りた人物と期間、書物数

酒井玄悦（利亮）△　嘉永七年～文久元年　五十一点
石川勝躬（純孝）●△安政三年～万延元年　五点
伊藤平左イ門　安政五年　一点
三宅国之助（重武）　元治元年　一点　猿投禰宜
中野信次郎　文久元年～慶應二年　二点
中野清風　△　文久三年～元治元年　三点
石川文吾（千濤）●△安政四年～元治二年　十点　慶應元年六月八日死
光恩寺（了観）●△　安政四年　九点　安政六年六月廿一日死
大沢　安政六年～万延元年　九点
永田介次郎　安政四年　一点　名古屋広小路
次郎兵イ　安政五年　一点　渡刈村
深見藤十（篤慶）●△安政六年　二点
津田新十郎　万延元年　二点
浄久寺　慶應元年　一点　下明知
神谷喜左イ門（克禎）慶應二年～明治三年　四点　名古屋御園
榊原大和　慶應三年　一点　明治元年返す

※ 貸した人物と期間、書物数

酒井玄悦（利亮）△　嘉永（年欠）～文久元年　三十七点
石川勝躬（純孝）●△嘉永五年～文久三年　二点
伊藤平左イ門　嘉永五年～安政五年　四点
竹尾東一郎（正胤）△文久三年　二点　舞木
三宅国之助（重武）　子年　一点
中野角イ門（清風）△嘉永六年～甲子　六点

中野信次郎　安政四年～慶應二年　二点
龍興寺　庚戌　～文久元年　一点
市岡犇蔵（和雄）　△天保八年　七点カ　名古屋
佐々木秀意　申年　二点　安政五年死
宍戸孫之丞　安政六年～文久三年　三点
毛受清兵衛　安政四年　二点
深見藤十（篤慶）●△安政四年～庚午年　二十七点
光恩寺（了観）●　△安政四年　二点
大沢　己未年　五点
永田介次郎　安政四年　一点
水田柳庵　安政五年～慶応三年　二点
林三蔵　安政五年　三点　安政六年六月上京
中野清三郎　安政五年　四点　安政六年三月死
福谷武助　安政七年　三点
津田進十郎　万延元年～公庫　二点　慶応三年倉田石川日高に害せらる
羽田野常陸（敬雄）△元治二年　一点　吉田方
宍戸四郎　慶應四年　二点　刈谷
万徳寺　慶應二年　一点　岡崎菅生
村井久兵衛　慶應三年　二点　明治元年九月死　伊勢古毛野
碓井珉次　明治二年　一点　刈谷
神谷三園（克禎）　明治二年　一点　名古屋
外山篤衛門　明治四年　二点　阿野
根本啓之進●　明治三年　一点　衣
中井大助直志　明治三年　二点

（4頁より）忠順の平田学派への傾注はこのころからのやうである。

殊に興味深いのは千種有功関係の書物である。有功は京都の公卿でありながら庶民の歌人とも交流した人物であつた。利亮は眼科医として京都の錦小路家と関係があり、その繋がりから有功の門人のやうな立場であつたやうである。忠順は有功にかなり興味があつたと見え、利亮を通して有功の著作を借りて写したやうである。安政二年に有功と黒澤翁麿の論争を書いた『犬物語』（写本）を借りたのをはじめ、翌三年には歌集『和漢草』『日枝百枝』『古鏡』と言つた三部作を借りてゐる。『日枝百枝』『古鏡』は刊本であつたが、『和漢草』は写本であつたはずである。忠順はこの本を二月十八日から三月一日、四月三十日から五月七日まで二度に亘つて借りてゐるのである。有功は既に故人であつたので、この『和漢草』の未刊を惜しみ、この刊行を思ひ立つたのであらう。序文を書いて江戸の小林歌城に添削を依頼したのが、この年の十一月（添削が村上家に残る）。美濃屋から刊行したのが安政四年二月であつた。このことは以前から推測してゐたがこの貸借簿から明らかになつた。有功の『和漢草』は忠順が手を入れて刊行したものである。

※村上忠順に関する論文を纏めた『村上忠順論攷』を百三十年祭を記念して刊行しました。ご希望の方はお申し出ください。

（送料共三千三百円）

問い合わせ先

〒一一〇-〇〇〇一

台東区谷中三丁目七の三

中澤伸弘

tel・fax 〇三-三八二一-二四六二

平成二十六年度

活動報告

事務局　酒井順子

○ 五月十日

＊定例総会

参加者九十名

総会の様子

＊記念行事

・郷社・神明宮神楽巫女舞

巫女舞

＊記念講演

「手紙の力―忠順関連の書簡資料を読む」

講師　名古屋大学大学院教授

塩村　耕先生

＊「忠順大賞」表彰式

○ 七月五日

＊女性部研修会

「犬山城下散策の旅」

参加者四十名

・犬山城下町・町屋

・どんでん館

・トヨタ鞍ヶ池記念館

からくり人形の実演を見学

○ 十月二十八日

＊歴史探訪

「維新への騒めき」

参加者三十八名

・田原市渥美郷土資料館

・田原市博物館

・トヨタ会館

田原市渥美郷土資料館

磯丸生誕250年展を見学

○ 九月六日・十月四日
十一月八日・十二月十三日
★四方樹大学
参加者延べ五十四名
講師　名古屋大学大学院教授
塩村　耕先生
講義内容
・「手紙文」

講義風景

○ 十一月二十三日
★忠順翁命日墓

忠順大賞入賞作品

応募期間　十一月二十三日から
一月三十一日
応募総数　一三七六首
入賞者　二十名
選者　荒川心星先生

入賞された二十名の方とその作品を紹介します。

○

小学生の部

豊田市長賞
堤小　五年四組　中野　吉都
一つぶの米の重みが手に伝う
稲刈りをして生まれた感しゃ
※稲刈りの思いがこもるゆたかな一首。上の句の表現がとてもいいので、作者の表情まで浮かんでくる。

豊田市教育委員会賞
駒場小　六年一組　尾崎　佑弥
ともだちとすごしたきょうしつうんどうじょう
まだまだつづけたのしいじかん
※明るい情感が生きている。うれしさあふれる一首。

会長賞　金賞
堤小　六年三組　青山　彰篤
山の端に夕日が沈む神無月
あしたもきっと秋晴れだろな
※豊かな詩情がこもり情景が浮かんでくる。心に残る一首。

会長賞　銀賞
堤小　四年四組　増田　柚花
しんしんとふる雪見なれた畑さえ
キラキラひかるまほうの世界
※一首の姿が端正に仕上がっている。結句がすばらしい言い方ですね。

会長賞　銅賞
堤小　六年五組　石川　渓斗
田んぼ道毎日せおったランドセル
ぼくの背がのび小さくみえる
※うれしい心情がにじむ一首。下の句が光っている。

中日新聞社賞
堤小　四年三組　亀田　隼杜
つつみの自然草木に花に雨地めん
おいしい空気をいただきますね
※つつみの自然をたたえて快い。下の句がすばらしい。

優秀賞
駒場小　四年一組　清水　愛翔
とうさんにドッチボールであてられて
ぼくはくやしく空を見あげた
※思いがすなおに力強くうたわれている。いいおとうさんですね。

優秀賞
堤小　三年五組　くまがいけいご
持久走でぜんりょくしっそうもう死にそう
母のおうえんで走りきったよ
※「おかあさんありがとう」のうた。よろこびの声がきこえてきて快い。

優秀賞
堤小　二年三組　福田　みお
さむいよる家ぞくみんなでなべかこむ
ゆげのむこうにみんなのえがお
※明るくあたたかい家ぞくが浮かんでくる。すてきなうた。

優秀賞
堤小　一年一組　なかのさき
うでまくりりょうりせんたくふゆのあさ
まるでわたしもちいさなかあさん
※女の子らしいうた。「ちいさなかあさん」がいいですね。

○ 中学生・一般の部

豊田市長賞
高岡町　早川　寛子

前中のマラソン大会最後尾の
ランナー称える生徒等美し
※必死になって走る子と応援のすばらしい姿が重なって瞼に浮かぶ。作者の穏やかな心情があたたかい。

豊田市教育委員会賞
青木町　奥村　良枝

難病の友の手硬く冷たくて
ひたすらさすれば残照の見ゆ
※励ます言葉はむつかしい。下句に真情が滲み出て心打たれる。

会長賞　金賞
前林中　三年六組　前田　菜乃

あのときのきんもくせいのきのしたで
ちかったことばずっとともだち
※作者の言葉がこもっている。下句の表現がぐっと胸にひびいてくる。

会長賞　銀賞
前林中　二年五組　神谷　咲来

あせなみだたくさんながしたことしのなつ
こうかいわすれずはしりつづける
※記憶のなかの夏の日をあざやかにうたに留めていて心地よい。

会長賞　銅賞
前林中　三年四組　伏見こみち

思い出を心にいっぱいつめこんで
私は今年巣立ちゆきます
※一つ一つのことばがひびき合って、巣立ちゆく姿が美しい。

中日新聞社賞
前林中　二年三組　伊藤　茉央

ありがとうそのひとことでつながる輪
ふだんいえないかんたんなことば
※素直なうたで心にひびく。「ありがとう」のいえるやさしい子。

優秀賞
前林中　二年五組　近藤　真帆

きこえてるミシンのおととわらいごえ
いつもとおなじそんなまいにち
※上の句の表現がとてもいい。快活でさわやかな作者が浮かんでくる。

優秀賞
前林中　三年八組　後藤　達也

顔の色言語は違う外国で
出会えた僕のベストフレンド
※思い出のうた。結句の思いは深い。

優秀賞
前林中　三年八組　前田　剛志

ともだちときずなふかめたとうきょうで
たのしかったねしゅうがくりょこう
※修学旅行の楽しい思い出が共感を呼ぶ。

優秀賞
前林中　二年三組　小口　隼矢

先生の心を描く白チョーク
チャイムと共に変わる黒板
※中学校の授業風景がユーモラスなうたになり心くすぐる。

編集後記

本年度は、忠順翁の歌の師である糟谷磯丸翁の生誕二百五十年記念展が田原市で開催されました。それに合わせ、歴史探訪で田原市を訪れました。学芸員の方より磯丸氏の歌や人となりなどの説明を受け、磯丸翁の短歌に対する想い、また人々から神様と慕われていたことなどを知り、磯丸翁の足跡の一部に触れる思いがしました。また、忠順翁は、磯丸翁に短歌の添削をしてもらったのか、それは、どんな歌だったのか、そんな疑問が湧いてきました。これは、昨年度から本年度にかけての四方樹大学で、忠順翁が父忠幹や息子忠明に宛てた手紙文を読み説く講義を受けたためかもしれません。

本年度も本顕彰会を支えてくださった方々、またこの会報を発行するにあたりご協力いただいた皆様に心より感謝いたします。

（事務局　酒井）